

音源の比較試聴(3)

—ブルックナー交響曲 7 番—

1. 始めに

前報(2)に引き続き、各種音源の再生経路に関する種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

どのような対策がアナログアキュライザーの導入以降に各再生経路についてなされたかは前報(1)のとおりです。

今回のアナログ再生も、前報(2)同様、TohrensTD124 を使用します。

また、アナログ盤と CD は、再生前に CD クリーナーの処理を行います。

音源は各種フォーマットのブルックナー交響曲 7 番です。

アントン・ブルックナー 交響曲 7 番

アナログ

BERLINER PHILHARMONIKER RECORDINGS KKC-1167/8

(ダイレクトカッティング盤)

ベルナルド・ハイティンク指揮ベルリンフィル

STAGE+

ゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団

クラウディオ・アバド指揮ルツェルン音楽祭管弦楽団

アンドルス・ネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウス

CONCERTGEBOUWORKEST

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

ベルリンフィルデジタルコンサートホール

アンドルス・ネルソンス指揮ベルリンフィル

ベルナルド・ハイティンク指揮ベルリンフィル

CD

RCO LIVE RCO 14005

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログのハイティンク指揮ベルリンフィルの演奏は、ハイティンクの引退公演のダイレクトカッティング盤です。最新のダイレクトカッティングのアナログ録音であり、構成のしっかりしたベルリンフィルらしい演奏をアナログらしい深みと厚みのある

音で聴かせてくれます。

STAGE+のショルティ指揮シカゴ交響楽団の演奏は、1978年ロイヤルアルバータホールでの収録です。ナローレンジで解像度もよくありませんが、演奏技量の確かさは伝わってきます。

STAGE+のアバド指揮ルツェルン音楽祭管弦楽団の演奏は、2005年のルツェルン音楽祭の演奏の収録です。先のショルティに比べれば、音質はかなり向上しています。アバド指揮による穏やかな演奏が聴きどころです。

STAGE+のネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウスの演奏は、2018年のゲヴァントハウス創立275周年記念の本拠地での演奏の収録です。同じSTAGE+の中ではもっとも音質がよく、繊細できめ細かい表現からダイナミックな総奏まで表現できています。ネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウスの演奏は、曲の違いの演奏会を聴いています。

上記3音源は、同じSTAGE+からの配信ですが、収録年代による音質の変遷が興味深いところです。

CONCERTGEBOUWORKESTのヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウの演奏は、LANの受信経路の諸対策の効果で、弦のトレモロや木管の繊細な表情やホールに響く総奏の厚みなどが出ています。コンセルトヘボウの演奏は指揮者と曲の違いで演奏会を聴いています。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのネルソンス指揮ベルリンフィルの演奏は、2022年の収録で、先のライプチヒゲヴァントハウスの演奏と指揮者が同じネルソンスのオーケストラ違いですが、まぎれもなくベルリンフィルの音です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのハイティンク指揮ベルリンフィルの演奏は、2019年の収録で、上記のアナログと収録が同一と見なされますが、厚みと深みのアナログに対し、すっきりとした切れの良さがあります。

CDのヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウの演奏は、RCO LIVEのレーベルであり、演奏の印象からも、恐らく上記のコンセルトヘボウの配信と元音源が同一と考えられます。弦木管の表現などは、配信よりしっとり感があり、CDクリーナーの効果が見れていると感じられます。

4. まとめ

上記のとおり、それぞれの音源と再生経路について対策の効果が確認されました。アナログ盤は最新のダイレクトカッティング盤の真価を聴かせてくれ、4つ異なるサイトからの配信は、LANの受信経路の諸対策の効果を、CD再生はCDクリーナーの効果を確認できました。今回は、アナログと配信の同一の演奏、CDと配信の同一の演奏、おなじネルソンスの指揮でオーケストラ違い、おなじオーケストラでネルソンスとハイティンクの指揮者の違いなどが聴けたことが興味深いところです。

以上